あふれる情報の中で

東京医療センター
副院長
臼井　宏

東京医療センターの図書室が国立病院機構の文献情報センターを兼ねているため，私は国立病院機構の文献情報センター長という役目をもち，また，当院の病院情報システム管理室長を務めている．いずれも厖大な情報を扱っている．

図書室で思うのは，文献検索の今昔の差である．私が医学部を卒業した1970年代，小さな症例報告であっても，発表しようとして，関連の文献を網羅的に調べるのは大変な作業であった．医学中央雑誌とIndex Medicusを大学図書館で1冊1冊見て，必要そうな文献はノートにメモしていく．古い書庫で雑誌を探す．書庫の隅の暗いデスクで目を通して，内容に一喜一憂したり，先人の知恵に驚く．重い雑誌を抱えて3階の書庫から1階のカウンターに降りてコピーしてもらう．所蔵されていない雑誌を，他の図書館との相互貸借で入手してもらう．大学にいるときは空いている時間に図書館に行けばよいが，地方の病院に出張しているときは，休日も開館していた母校の図書館に通う他はなかった．それでも先輩たちには，「君らはコピーという便利なものがあるからいい．俺たちは大事な文献は自分の手で書き写していたのだ．便利になると，かえって勉強しなくなるのではないか．」とよく言われた．

現在はどうだろう．インターネットを利用して，文献検索は非常に楽になり，長い時間を使わなくてもある程度の検索が可能であるし，アブストラクトはすぐ入手できる．Full paperを読める場合も少なくない．複雑な検索をすることも少し時間を掛ければどこでも可能だ．今日外来に来た患者さんの問題について，自分の持っている知識では不足の場合に，今夜調べて明日にはよりよい解決法を考える手立てを得られる場合さえある．若い医師や他の医療職にぜひ日常的にもっと利用して欲しいと願っている．その点でHospnetが以前よりレスポンスがよくなったことは嬉しいことではある．

患者さんたちも，以前とは全く異なる医療情報環境にいて，病名が分かれば自分で調べてくる人も多い．情報はインターネット上にあふれているが，その正しい取捨選択はなかなかできない．治験を含む複雑な過程を経て保険に収載される医療用の薬剤と，Web上で宣伝される民間療法的な製品の違いを理解せずに，ネット上の宣伝を信じこんでいる人に説明するのは容易ではない．

一方，当院のように電子カルテが稼動すると，診療記録として蓄積される情報量は厖大なものとなる．4年前に稼動し始めた当院のシステムは約15TB（テラバイト）のディスク容量を持っているが，予想を上回るデータ量の増加があり，このままではあと1年で容量が不足する事態となっている．それだけの情報が蓄積されていながら，その利用は極めて僅かである．各部署で統計資料を作成したり，研究の端緒として症例を病名や投与薬剤をキーに検索することは頻繁に行なわれていて，紙カルテの時代より容易になったことは間違いない．しかし，医療の評価のため，あるいは，経営上のヒントを得るためのやや複雑な解析はほとんどできていないといってよい．システム自体が情報の利用を考えて作られたとは言えないこと，入力データに欠損が多いこと，それを専門に行なう人員が確保できていないことなど理由はいろいろ考えられる．約2年後に稼動予定の次期システムでは，最重要な課題として取り上げて行きたい．

最後になるが，雑誌「医療」の，国立病院機構のすべての職種に正確かつ有用な情報を伝える役割は今後も重要と考えている．

お詫びと訂正

64巻1号32ページ掲載の下記論文の著者所属先に誤植がございました．お詫びして訂正いたします．
「遠隔病理診断の導入と運用状況　−依頼側病院の検査技師の視点から−」
山崎　直樹
（誤）国立病院機構神奈川病院　放射線科
（正）国立病院機構神奈川病院　研究検査科